

和訓栞

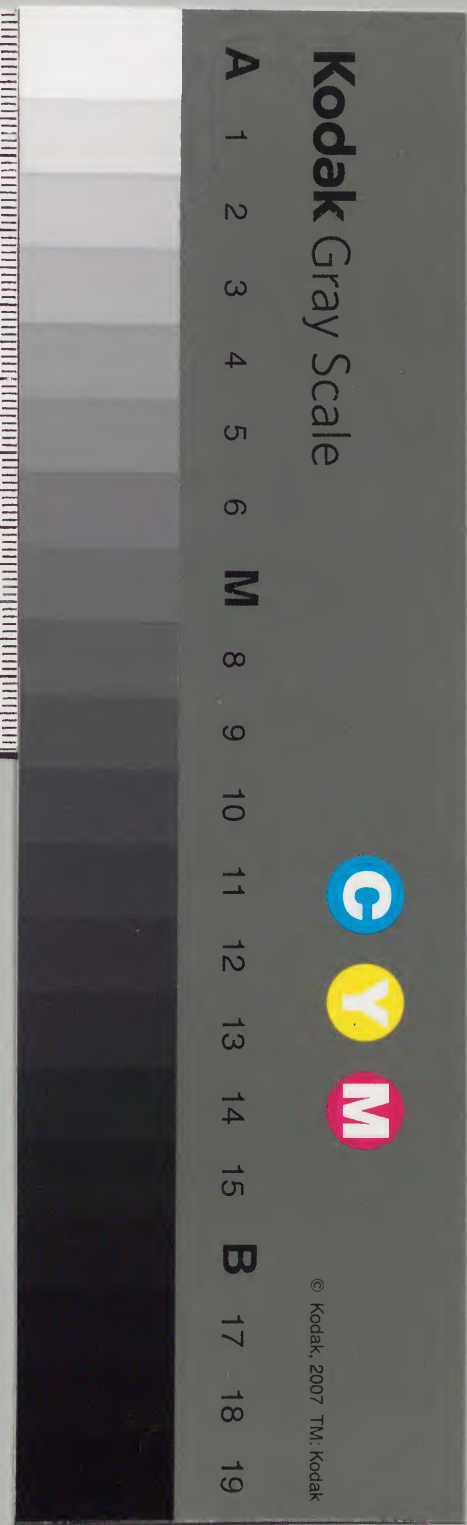
保之部

廿八

和書門			
二	一	六	五
一	八	函	號
八	二	架	冊

內閣文庫			
二	一	六	五
一	八	函	號
八	二	架	冊

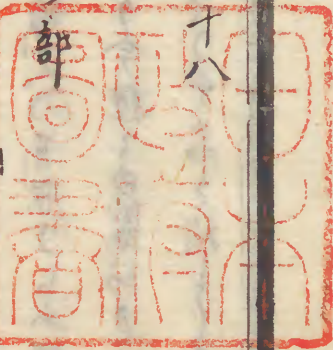
內閣文庫	
番號	和 21651
冊數	82 (24)
函號	263 10



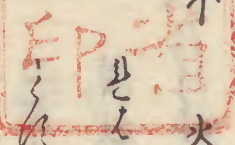
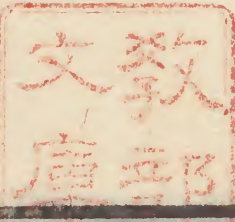


倭訓栞前編二十八

保の部



洞津 谷川士清 纂



火をわくこと通音なり或ハ唐音なりと云ふこと古書多くやと云ふ
 こと自語をわくこと○穂ハ火より轉せり穂乃出初る色皆赤一穂穂と云
 こと貫之集ニ田より家ト云ふ所と云ふこと神代紀ノ類と云ふも同
 江次第ノ前本謂之稻切穂謂之類本類國司貯積之惣名也と云ふこと○鎗
 鋒と云ふこと穂乃云ふこと○秀字と云ふこと浪秀と神武紀ノ云々
 こと穂ノ穂神紀ノ國乃云ふことと云ふこと穂と云ふこと通つ西土も秀出
 之穂カと云ふこと○最字と云ふこと秀と通つ○太と云ふこと五
 たり穴太乃類なり古事記ノ三穂と御太と云ふこと同○百字と云ふこと五
 百乃類なりと云ふこと同韻なりと云ふことと約めず詞カと云ふこと○帆ノ穂ト云
 轉せりや遠くより云ふことと云ふこと意カと云ふこと一凡ノ云々ハ云々
 帆も穂も云々又羽と通ふこと一字彙掉船羽也と云ふこと

倭訓栞 卷之二十八

くろ○南京福建船乃帆竹乃たろろなり北國とすは船も此の放よる
そ○さくほの若蓬也木綿やの縫布也童蒙頌讀の箋もすあり○帆山の紙
前より○三河郡名寶飯やよる餼飯の作ふ誤なり○古書に保寶袋
報袍たるとは乃假名を用う

△ほあ

△ほい

當時布衣乃よくせなりといふも倭名抄のりきと訓
れ裁縫とくよりかりなすれいよる院中より布衣始とて御謀位乃後
上皇初御狩衣着御乃規式成らる唯上下分せん今青待の
る布衣乃音と呼ふなり○源氏よりえんは本意乃よめる本意乃字
漢献帝紀より馬と追乃俗語よりいふ乃轉なり

△ほくみ

笠蓋の門立藏開酒開穗海

△ほく

今婦人の首服より帽子の音なり西土乃書に面帽ふもる
帽中の類なり今種々の製らしも實はつる乃首略なり江戸乃婦女
のくまの髪とて黒と絹と頭面と包らるる其後綿と絹と制り頭面

と覆ひ一室永乃比まうる乃風俗なり今のびりぼりハ明らる蓋類の
類なり一北國の頭巾とほく一と唐式は無人帽子皆寛大露面不得有掩蔽
とえゆ今乃清人の帽子の頂は紅と赤と幾筋もかけり夏を毛乃ゆること
の次つけ
そ○今昔物語の錦の帽子ちる男もええなり○舊詞大詞はほく一す
づくとらハ帽子とてふははとて前かけて編み物と前かちなり又大
飼ハぼく一と松皮ぼく一とらる○つと草乃移とぼく一と即藍
紙なりよそつと草と毛張とぼく一と花とらる

△ほく

日本紀の僧とよる法師の音なり一カクとかく書来具の僧と

梵語翻と和合も無諱といふはとてむき和訓の意なり

詞乃僧称髪長と儀式服の法師と書り大法師侍法師承仕法師中間法師
なりとて建武年中行事の大法師次おは法と書り○乃法師録卷
右大臣集より○法師律師乃号はり道士より出く浮屠乃称し非す
とらる

△ほく

律の八卷之二十一 今いふ謀判とちる判ハ判

形して印章指す甚其罪大重しとて為は從ふのふく謀及より轉訛
せる處一〇謀及と謀判し同一かゝ大逆と惡逆と亦異也

布袴のふみくせくやう反ふ也西宮記に布袴舊切上下着之近年諸宮人
著之くそそり桃花葉葉に常袍に著下襲指貫是と布袴しとと飾扱
とのいさうやくとちつひさる布袴とと催束帶ととらふ也とととらふと

布袴用ゆる風一〇直衣布袴に直衣に下襲指貫着すとらふ也
法師のうませる子成らう日本後紀に官符應亂正僧子假藤出身とる

〇朝鮮國の父母の喪派重んと偶また喪中の子ふく産する事ある其子成と
つゝ僧と人倫に非る意を示すとらう

北條とよあう伊豆國也〇北條家の僭臣うして天下の權成恣とせしと
亦百年の間九代よ及り義時の代よ上皇成隱岐と遷せしと天子成宍立と奉
了大臣成進退とる事其家よかく天下の人朝廷ある事成知ると手せうとれ
其子恭時賢うして人心成得恭時の孫時頼形を變へ僧と化つて治成求也時頼
の孫貞時と祖父成慕尚して國を成巡り三年うして還る其子高時不徳とらう

三ひぬ〇北條安房守氏長の武田家れ信を小幡景憲と得て和漢文武之事理
に精通し加之紅毛國の戦法火術に其蘊成究む

我邦古より封建也よて尊卑不相凌犯禮節農末工商遊手の徒於
文武官士兵卒対捍せと拜趨成冬と設不遜失禮の者ある其人忽斃之而死
殺人之咎本朝之國律也

庭訓と侍所の奉書とと少室町家の時と上意成受て奉行より出と
文春成奉書とらふ〇紙と大奉書ふとらふも是と据也

譬喻經に其見聞者有所作為轉以法樂勸益一切とととらふ法に
其音はふちう又ほつとと呼り法のためよする音樂をふと借用ゆる神佛
乃手向よすはと法樂乃和歌法樂乃能かるとらふ事あると

出納家と法論みそ乃公事とらふ事あり護命僧正法論の時より
造かといつ一説と真福寺維摩會に講師小水乃為と座と退く事成ら
しく是成造つて食ひしとられ名かりしとらふ花鏡と舉子乃廷試と銀
杏と煮く食へら小水と截とらふ是と座と退く事と悼らうとらふ職

人歌合

うつくしの形 丹都のやううつくしやうつくし 孫のあひなま

△ほえ 近江の柴乃細きとらう北國の九う柴乃うらう ○挿餅家
木乃葉乃赤くう枝乃火枝乃あかり

△ほと 栗花物語の御風をかい 竟しては成れとすしとせしちふハ
蒲黄のや

△ほろ 外とよらう ○ほろくほろつくれとらふ俗語の火香かたア
ほろひ 日本紀の寿とよらうがひ 反さかう祀とほとよむ同 延喜式
上祭とよらう

ほろけ 田舎の門戸又倉乃戸かしく 稻のかりらうと穂と懸く神の奉
かろとらう 籩蓋よも五穀取初穂掛とらうとらう 澄源うらう

とらうけえは 登けのつらうとほろけぞすまういへん
又稲のかりて後物のかけてやとま今も同 古今集の秋乃田入
稲てふてもかけかきとらう 頭注の秤よくかく物かたしとらう

ほろけ 朗字とよらう 日本紀の窟如靈異記の窟とよらう 古今集よまの
乃ほろけとらう 明行のとも名義集の益成囉迦北翻火星とらうとらう 林

語かまう ○誘はらうとらうとゆくとらうもねとらう 俗語か
ほろひぶと 倭名鈔の乞索見靈異記の乞由とよらう 乞巧乃雲人の心とらう

ほろひぶと 枝ひく物とえとらうかく名つひとらうなりがひ 反さかう
ほろき 源氏にせもほろきたらうとらうとらうとらう 白ほろけとらうとらう 詞か
とらう ○口語のほろきと折るかきとらう 其聲のや

ほろき 古書に禱字祈字賀字壽字とよらう ぼく同
かまら 古歌のよらう岸陰をらう今と京北山辺のらう 辞也又やきとらう
とらう 筑紫人のやとらうつひ因幡ふらうのやがとらう也 西行秋

とらう 古事記の本岐秋之片秋也とらうやぎの祝のやとらう 旋頭歌半秋也
やとらう 祝詞式に献横刀時兒とらうの神祇令に九月十二月 贈日大教東西支部
上教刀讀教詞謂文部漢音所讀者也とらう ○兄成教詞とらう 今同 又神

とらう 古事記の本岐秋之片秋也とらうやぎの祝のやとらう 旋頭歌半秋也
やとらう 祝詞式に献横刀時兒とらうの神祇令に九月十二月 贈日大教東西支部
上教刀讀教詞謂文部漢音所讀者也とらう ○兄成教詞とらう 今同 又神

とらう 古事記の本岐秋之片秋也とらうやぎの祝のやとらう 旋頭歌半秋也
やとらう 祝詞式に献横刀時兒とらうの神祇令に九月十二月 贈日大教東西支部
上教刀讀教詞謂文部漢音所讀者也とらう ○兄成教詞とらう 今同 又神

轉せむなる一又ほこはくたしとも

ほこり 日本紀に神庫とほくろしとあり倭名錄に寶倉ともあり今も専ら

祠とらふありほの秀のま高きとらふとらふ叢祠の草木岑蔚之社也と云

ほこり 埃とらふ火類のまなる一灰塵とらふなり○算上ほこりともあり

ちり或は崎崎ともええり○土ほこりとも云

ほこり 矜とらふり又伐と同一秀起乃まろ物ほこりともえり言今集

撰字鏡に誇とらひほこりともあり○大神宮乃御饌に供へ奉修と作る田

所乃御田殖乃果よ田長の人奔詣ひ鼓吹し送りて行と誇とらふなり

ほこりぬ 菅家万葉に綻字とらふり字に衣服とて主とす是と源氏に人く

皆ほこりびて笑ぬとあれと訓に頬轉乃を口と開く乃意なる一恨とのほこり

かとも同一歎冬誤綻暮春風の類の花のほこりぶとらふもとくともあり

同一新撰字鏡に綻と作りて又舒ともあり俗にふくともとらふ

又破綻とも

ほこりぬ 日本紀に弄槍とらふり古事記にも矛ゆけとええり矛ゆけ

の義なりとらふ倭名抄にほこりともえり續紀に拵槍と作る樂の名か

に宋朝の樂とて今絶たり今義解に槍の木の両頭銳之者即戈乃屬なり

と云えり

ほこりぬ 俗語なりほこりともえり轉しは語なり一ほこりともあり

△ほこり 對馬にて巫理の類の称とらひ祀の系なり一撫事とらふ古の撫物

なり一違事とらふ古乃方違へたり一往昔對馬に天皇とらふなり

今十家よ及つりほこりともあり

ほこり 神代紀に祀字とらひり火裂乃を心火乃裂出るとらひ○俗に情と

隠さぬともえりともあり

ほこり 源氏にえゆ菩薩也集解に菩薩ハ梵音具云菩提薩埵摩訶薩埵舊翻大

道心衆生新譯乃云覺有情とらひ并に菩薩と同一と云やとらひり○

神社と稱する式に八幡大菩薩宇佐宮大洗磯前藥師菩薩明神社酒列磯

前藥師菩薩神社とらひり宇佐宮に應神天皇也大洗磯前の事は文徳實錄

うのり字書に乾飯かきくこと侍中群要に已刻供朝千飯事いふ埃
囊扱ふとて乾飯骨しんこととほしひの粉なふこと
正字通よりよる類なり○庭訓の精袋も兵糧なり

ほしひ 星合とかけり星合乃空も七夕とら星合の濱ハ伊勢一志即ち
今其里よたなごの社存す鶴乃橋も残すり支木集

いせの海築とふか秋ふハ今宵乾らん星合乃と也

○星川の負辨郡あり ○式に星川神社は白老俊の致し

明ぬとて空さうり行星川よれさうけやえんか

又鴨長明あり

かきまはり 星祭ハ関東評定傳よる真言家ノ尊星王法ありて當年星ノ

こと七曜のうらふ其年よあうたふ星とすなり朝野群載ノ尊星供告
文あり○周防乃吉敷郡高原氷上山ハ多良家より千餘年毎年二月十三日
北辰尊星と祭り所なり○星祭ハ美作なり

ほしひまき 紙速放侈乃類とより仕故乃義なり神代紀ノ撞とよ新撰

字鏡ノ姦とほしきまはくことあり○促と縦ノ同

ほしひかき 日本紀ノ令貪嗜ノ書てほしひかき一むことあり其略語
かき令欲乃意なり又褒匿乃かき也匿と志なりよむハ日本紀よる

ほしひとさかき 年中行事歌合四方拜よること且天子ごが星ハ
名とてかきせたまことなり

△ほしひ 乾をより日すはなり新撰字鏡ノ曝又焚とより曝も同し萬
葉集ノ涼もより

ほすひ 新撰字鏡ノ焔をより火吸の義あり

△かせ 越前ノ柴をらう○木の小枝ふるをかせんことハ關西の語也
ほせふ 神代紀ノ臨眺と訓せり直指抄強ちノ親なりことらうほせふ乃義なり

△ほせ 俗ノ河かほせりことらうは痛乃義なり

△ほせ 和名披ノ臍臍がよる倍よる東坡曰人之在母胎也母呼亦呼吸亦鼻
皆閉而以臍連故脐者生之根也○瓜蒂をほせりことらうも同し李乃類

一 遺らしき事ハ雅ニ出ク訓同 倭名鏡ニ云々云々 ○エ近乃ほごごごご
のハ筈も直筈も云々云々 ○男とほごごごごごご
かろ今ハほごごごごご ○男とほごごごごごご
ふろく埃叢抄ニ云々云々

ほごごご 細とよみろ ○和名抄ニ百央と訓せり細藤乃云々云々 ○新撰宇鏡
ニ取とよみろほごごごごご同云々云々

ほごごご 倭名鏡ニ變とよみろ切韻ニ逆燒ナリ云々云々又燧ニ作ル宇鏡ニ
防野火也云々云々云々 ○火ナリけハ消ス云々互けナリ雲ハ火退ナリ云々
童蒙頌韻ニ根とほごごごごご

ほごごご 臍帯とよみろ神代紀ニ臍とよみろ ○臍帯と断と續くらハ緒
とらよよつて又語とよみろ ○紫式部日記ニ御ほごごごのハ敷
乃云と待とハ式正の事らるト三議一統も大御所入御云々云々
ひごごご云々云々

ほごごご 細川の里ハ塔の岑と飛鳥岡との方ニあり云々万葉集云々多武の岑

一 細川ハ瓜トク合セ云々又南瀨の細川山云々云々 ○細川家ハ頼春の曾孫
義季三河の細川ニ居リ云々氏ハ頼之の執事云々云々義詮終ニ臨ク頼之ニ子
次卿ニ遣ル幸云々云々輔け云々云々義満ニ父次女ニおくる謹ク其教ニ流ス
事勿云々云々建徳二年補正儀来奔云々義満云々云々河内ニ還ル吉野ニ
ら云々頼之の子頼元ニ正儀を授云々南北合休神器の点ニ復ると云々云々
云々 ○去昔ハ源藤孝朝臣也征夷大將軍源義晴公の四男母ハ還翠軒義賢の女倭
歌ハ圓智院公國卿より古今傳授の正統を得云々云々石田三成凶乱の時倭歌のハ
訣次公家ニ奉云々云々

古と今と云々云々ねせの中ハ心の種と云々云々

義賢の女後三閨伊賀守ニ嫁シ云々時藤孝と供ニ往ク三閨の継子ニ云々
泉列岸和川の城守細川右馬頭元常養て嗣云々云々家次継ニハ始ハ前將軍義
昭公次補佐ニ後ニ信長公ニ侍リ豊太閤ニ属シ又神后ニ從ヒ武功のハ
め云々云々のハ非ず倭歌の道ニ達シ玉云々

ほごごご 三代實録ニ細長綿云々云々宇治拾遺ニ女乃懷東ニ云々云々

赤白紅の打たぬ細長くしらす弄花の如く上臈乃うくしらす物チウとえ
えしらす雅亮抄の鳥子かゝるの如く長んんしらす女官飾抄の皇太子も如
童乃時よ召せしらす事んん又女房積束抄の用細長之時不用相袴等
是先例也しらす

ふそこの 索、麵の内、裡詞ふるしらす海人藻芥よんんしらす

ふそこの 常の螺鈿蒔繪の叙皆細太刀しらす、儀刀也しらす

ほそくづ 倭名鈿の燐とよめり火屑乃んんしらす○篤信乃説の偏、郡乃

人腰よ帶る火打囊と宝藏しらす宝藏鯛も其口裏の口と括るしらす
名くしらすは此ほそく宝藏し誂せらるしらす

ほそこの 倭名鈿の廊と訓せしらす細殿と江次第の書せしらす延喜式よ夾書と訓

せり

ほそこの 細男カゝるしらす栄花物語の御霊會乃ほそ男乃手拭しらすかほくし

たるしらすちとんんしらす山城離宮ハ幡の木、偶人乃ほそ男と名く物あり春
日若宮乃細男と同一しらす

ほそこの 儀式帳の細程しらす延喜式よ小程し書は是方り大程よ

之くしらす以一把為束とんん

ほそこの 陳とよめり楚辞未注の扶而長也とんん

かそこの 源氏よんん少楽の名也倭名抄よ保曾路又勢利とんん二曲

也かそこの 階史會要かゝるしらす殊、勅しらす國の名成しらす勢利以別のし
く記せしらす上、次合せしらすと唱束せしらす

△ほく 材木のしらすとんん指、拙しらす歳華紀原の感除、夜焼骨融しらす

も同一しらす山里よんんわらうしらす木とんん火立の承れしらす歌よんん山
かつのたしらすとんん火の火のしらす尾張出雲よんん伊勢よ根

こと安房よんん総州よんん武藏よんん又根木とんん況のほくしらす
ぐんん新撰字鏡の燼又燐煨かゝるしらす火立、抗乃んん魚しらす○は

うしらす口語もほくしらす出たかゝるしらす八瀬大魚乃んん里、同
姓婚姻しらす他郷よんん其意とんん

親の親子の子の山、棧の火けしらす

も給うそ乃もさみれまかりしつゝ又さつは物語よほんでしつゝ
ア○ほくえふとほてしつゝあたえ及てちり馬子乃馬と叱るよほてつゝ
らしつゝも此意ちりし物とちりし時し手敵ちりし事とほてつゝ
了

ほづり

颯母とらふ火光の養ちり白氏文集乃注し颯母如虹也と云つゝ字典し颯
ハ颯乃傷り颯ハ海中大風也と云つゝしと佛經ハ風如貝と云つゝ新撰六帖

山乃くはほつゝせぬお室乃浦よゆひひよりと出舟人

○俗し婦女乃怒意ゆつて氣よすかどほてつゝハ颯母より出つゝやどて
波風たつべととてちりしつゝ

△ほど

程とよめり道乃ほどなりしつゝ是なりほどらひもつゝらひ又とちり
ほつゝつゝ義通つ分限とらひ辞ちり万葉集之間とよめり此ほどなりしつゝ是
なり○所字許字つゝもほどとよめり三年所十年所二十許年三十許
年ふしとけぬ○恰合しつゝとやとつゝハ節字の意也真字伊勢物
語し朔字をよめり曲禮乃樽節茂ほどと云つゝつゝも是なり注し樽ハ哉

抑也と云ふ日本紀ハ二字成しはかことと云つゝつゝ○源氏よ人のやとつゝ

つゝ人品の名也○俗しほど拍子とらつゝ程と隨て拍子もはせはちり藤源抄
神樂ハ和琴とて其程と正しと拍子と打ちりし見ゆ○ほどとつげつゝ

ハつゝつゝ乃分刺相應とらつゝ○神代紀ハ陰とよめり火石の香前陰ハ氣
乃發すふ所なりとらつゝ古事紀ハ陰上もよめり御陰井ハ大和高市郡吉田

村よあり○承久記武人乃姓名よ女陰即ありしつゝつゝや○陰根茂
つゝつゝ神鉢とせしハ奥然とありて賢方中將の故事よありしつゝ又山城

乃苦集滅道ハ金勢神とてありしつゝつゝ梵天王乃陰根と神とつゝ苦集事
西域記よありしつゝ○土國鬼ともつゝ蔓乃長とつゝ間ありしつゝ茅子の如し丸

根多く連つ階つとて名くはありしつゝ飛洋つゝつゝつゝ遠江乃ありしつゝ
岡とつゝ藤とつゝおきしつゝ○新撰字鏡ハ石長生又面部根又葛と訓せつゝ○

土草沁もよめり倭名欽ハ菘冬まらほつゝ訓せり土中よかくせたるとつゝつゝ
○田舎ハ竈乃反乃下塊乃たれはともほつゝつゝ同義なりしつゝ

ほづり

よめりほづりハ萬葉集よめり程ちりつゝハ取諾ちり沫雪乃ほづり

ませたまふしつるも同義方なり

ほくたふ 喉張ノドの公字書ツツに審ニ口瀟ニ食ルと云えり

ほくたふ 和名鏡上振とほくたふとあり梓の如く字本すれと名とせ

こと今か立と書に暗推り誤なりとあり○平家物語に龍乃ほくたふてい

りて雅亮抄に車ほくたふていとも云えり○倍の竹ふと云三本よせて結

かめ足と開と物と掛るとほくたふとも云ふなり

△やまね 譽をよめりやめられのふめら及まね又すれ及め也日本紀に善哉

とあり

△やみし 日本紀に踏石をよめり霞をよめりともありハ雲御抄にハ

むしと云えり

△やむ 神代紀に褒美とよめり秀とよめりかゝる詞なり譽も同

ほめふともいふめふむ也讚と同一

ほん 神代紀に踏とかんともありいむと通せり○書籍を本といふ事

後漢書に草本と云え皇朝類苑に本と云かりんを韓文に注に倍文謂背

本暗記也と云えり古模印乃法なく昏寫と尊らんとするとして其草

創乃本各と云てりる名なり正本の北史に云え中箱本といふ小本

と云てりる○大内義隆紙と明朝に渡して書籍とすり北山日本と

り入又大内本といふ又朱氏新註五經と求むとあり○印本に鬼形乃者と

衆とす捺ハ斜精踢斗といふ星乃すゝとあり北平乃斜星の文章と司ふ

といふよりなるなり○源氏にほんよとありい手本と云ふなり○口

語よりいふ本乃字なり一豊後とていふつゝいふとあり○式正乃膳に何本

立といふ類聚雜要に云えり

やむけ 穂向のふ秋の田にやむけの風花薄やむけの糸菰のやむけのこと

ふくともあり

やむし 神代紀に火次ばよめり火叢のふ成一靈異記に焰とよめり

ほんご 紫式下日記にふるとほんごいふとありい手本と云ふなり○口

らり

ほんだろ 朝野群載に本道人以本道成業たると云えりい本算道之官を

